慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 明治時代, 東北地方における最初の女性写真師の足跡を辿って：<br>青森県弘前市と山形県酒田市の3人の写真師を中心に |
| Sub Title | Following in the footsteps of the first women photographers in the Tohoku region in the Meiji era : three photographers in Hirosaki and Sakata |
| Author | ガボリオ, マリ(Gaboriaud, Marie) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2021 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.53 (2021. ) ,p.1- 33 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | Amongst the new professions that emerged with the introduction of Western culture in late 19th century in Japan was that of commercial photographer. It was around this time that photography studios quickly spread across the country. While men predominated in this new profession, women also played an important role in the dissemination of photography. Most supported their husbands or fathers engaged in this work. Others, although few in number, made it their profession. In this study, we follow in the footsteps of three women who opened photography studios in two towns in the Tohoku region, Hirosaki (Aomori prefecture) and Sakata (Yamagata prefecture). The photographs that they left us constitute precious documentary records of the society and the culture of this period and allow us to reassess their extraordinary contribution to the dissemination of photography as pioneering women photographers at the local level. |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20211231-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

# 明治時代，東北地方における最初の女性写真師の足跡を辿って ——青森県弘前市と山形県酒田市の3人の写真師を中心に——

ガボリオ　マリ

## Summary

Amongst the new professions that emerged with the introduction of Western culture in late 19th century in Japan was that of commercial photographer. It was around this time that photography studios quickly spread across the country. While men predominated in this new profession, women also played an important role in the dissemination of photography. Most supported their husbands or fathers engaged in this work. Others, although few in number, made it their profession. In this study, we follow in the footsteps of three women who opened photography studios in two towns in the Tohoku region, Hirosaki (Aomori prefecture) and Sakata (Yamagata prefecture). The photographs that they left us constitute precious documentary records of the society and the culture of this period and allow us to reassess their extraordinary contribution to the dissemination of photography as pioneering women photographers at the local level.

## はじめに

明治時代，日本に文明開化の波が押し寄せるとともに様々な新しい職業が出現しており，写真師もその1つであった。写真館は瞬く間に日本中に広まり，それに伴って多くの写真師が活躍するようになった[1)]。その大多数は男性写真師であったが，中には写真の普及に重要な役割を果たした女性も存在した。夫や父親の写真館を手伝う形で写真に携わった女性が多かった一

1）日本に写真術が伝わったのは幕末で，長崎や横浜のような港町や大都市ではアメリカ人，ヨーロッパ人および日本人が写真館を開業し，各地に急速に広まった。日本人の写真師として初めて写真館を開いたのは，横浜の下岡蓮仗（文政6～大正3年（1823-1914））と長崎の上野彦馬（天保9～明治37年（1838-1904））であり，ほぼ同じ時期（文久2年（1862））であったと伝えられている。

方，自ら女性写真師として活躍した女性達も僅かながら当時存在したことは興味深く思われる。

本研究[2]の目的は，東北地方における現地調査に基づいて，これまであまり知られていなかったこれらの女性写真師に注目し，彼女達が地元の写真の普及に大きく貢献したことについて考察する事にある。

以前，山形県酒田市で，明治時代に最初に開かれた写真館の調査[3]を行った際に，当時としては珍しく女性写真師として活躍していた池田真佐の存在を知った。池田真佐は後述のように，池田芳江（慶応元～昭和 4 年（1865-1929））のことと思われる。

同様の例を求めて東北地方に限って調べた結果，青森県弘前市で，当時矢川写真館を開業していた矢川蓮（文久元～昭和 20 年（1861-1945）），美喜（明治元～昭和 20 年（1868-1945））という姉妹に辿り着いた。他にも東北地方で活躍していた女性写真師が存在した可能性はあるが，本稿ではまずこの 3 人の写真師の経歴と業績に注目してみたい。

最初に，当時の新職業のなかで写真師という職業について概述し，続いて初期の写真師を取り上げた事典や文献をもとに，全国レベルで紹介されている主な女性写真師のプロフィールについて述べる。次に，明治時代の弘前と酒田の町の様子に簡単に触れてから，それぞれの町に初めて登場した写真館の歴史を辿ってみる。なかでも矢川姉妹の写真館（矢川写真館）と池田真佐の写真館（玉影館）に焦点を当てる。池田真佐は全国的に活躍した先駆者世代ではないが，地元に最初の写真館の 1 つを開業し，写真師として活躍した女性である。最後に，当時それぞれの写真館でよく撮影されていた女学生の肖像写真を何枚か取り上げ，そこに足を運んだ彼女達の姿や日常生活等について考察してみようと思う。

## Ⅰ．写真師という新職業と女性写真師の登場

### 1．写真師という新職業

文明開化によって突如として根本的な変化を遂げた当時の日本には，様々な新しい職業が誕

---

2） 本稿に紹介した多くの写真は鶏卵紙を使用したセピア色の画像であり，また写真台紙には青・ピンク･緑などの色付きの紙が使われている場合があるが，印刷の事情で残念ながら白黒写真のようになっている。

3） 筆者は日本の写真史が専門ではないが，研究対象としている地域社会における史料および記録としての写真の役割と大切さには以前から着目している。明治時代の写真に興味を持ち始めたきっかけは慶應義塾大学の三田メディアセンター主催の「古写真で見る幕末・明治初期」展（2005.4.11-4.25）で当時の農村写真を拝見した事である。日本の村落社会を研究していた自分にとって，実際の農村の映像を目にすることは大変興味深いものであり，早速フランス語で論文にまとめた。Gaboriaud（2006：9-33）。その後，長年農村研究を続けている庄内地方で，写真がどのように普及していったのか，また明治時代のこの地域は写真にどう写っていたのかについて興味を持ち，論文にした。ガボリオ（2016：1-31）。

生した。それに伴って働き手としての女性の労働力が必要とされ始め，女性は少しずつ社会に出ることになっていった。以前から農村や漁村などの貧しい家庭の女性達は重労働を強いられていたが，それ以外の場では女性の職業は非常に限られており，また給料も男性より安かった。当時の女性の職業としては教師・看護婦・女工・電話交換手・店員・髪結いなどがあり，特に教師と看護婦は女性の代表的な職業となった。その他にも，内職をしたり，住み込みの女中として働く女性，あるいは花柳界で働く女性も多かった。また，事務的な仕事や，ごく少数ながら医師・新聞や雑誌の記者・作家・音楽家・タイピストなどに就く女性も見られ，その中に写真師も含まれていた[4)]。

明治 39 年（1906）に出版された『女子職業案内』[5)] には「写真師」という職業も紹介されており，そこには写真術は女子に適当な仕事である。写真業には，写真師や修整師など様々な仕事があり，米国などでは写真修整は殆ど女子の仕事になっている。有名な写真店には写真術を習得しようとする女子の見習生も見られ，写真師の内弟子となって修業するのは効率の良い学び方である。また女子に写真技術を教える教育機関として，牛込に「女子写真傳習所」が設立されたなどと書かれている。

「女子写真傳習所」[6)] は，女子に写真技術を教える唯一の教育機関であり，明治 35 年（1902），牛込西五軒町に創立された。当時，写真業は人気が高かったものの，女性が写真館に就職するためには写真の修整の技術などが求められたからである。しかし女子の入学者が少なかったために間もなく男女共学になり，当時の新聞広告[7)] にしばしば生徒募集が掲載されていることから生徒募集に苦労していたようである。

明治という新しい時代を迎えると多くの職業が生まれたが，近代化の中で，女性自身にも職業に関する意識が芽生え始めていたと思われる。女性が職業に本格的に関わるのは，大正期に入ってからであるが，明治末には女性の職業の選択肢が広がり始め，既に様々な職業に進出していた。

明治初期に写真師という職業[8)] に就く事は大変難しく，まず経済的に裕福でなければならなか

---

4）　黒岩（2008：83–85），近藤（中嶌監）（1993：20–32），［復刻版］（明治 39 年（1906））など。

5）　近藤（中嶌監）「同書」（173–179）。

6）「女子写真学院」『風俗画報』，第 282 号，（明治 37 年（1904）1 月 25 日：29）。この学校の名称は変更されたようであり，本雑誌では「女子写真学院」となっているが，住所は同じである。落合（中嶌監）（1993：323），［復刻版］（明治 36 年（1903））。

7）　読売新聞（明治 39 年（1906）3 月 14 日付け：4）他。［広告］写真学校生徒募集　男子・女子。牛込区西五軒町。

8）　明治の写真史については，日本写真家協会編『日本写真史 1840–1945』（1971：370–378），日本写真文化協会編『写真館のあゆみ—日本営業写真史』（1989：50–58），小沢（1997：86–175），飯沢編（1999：11–19），鳥原（2013：4–26）などを参照した。

った。明治 20 年中頃まで写真は湿板写真の手法で撮られており，写真機材のほとんどが高額な輸入品であったため，また写真師になるには高度な技術が要求され，長年の修業や化学的知識等を必要としたからである。写真師は高級技術者と見なされ，写真師の職業的地位は高かった。また写真の撮影費が高額であったことから，肖像写真を依頼したのは限られた人々であった。

写真館の草創期，撮る側同様，撮られる方もかなり大変であったようだ。というのも撮影中はしばらく動く事が出来ず，我慢を強いられたからである。また当初，「魂を取られる，寿命が縮む」というような，写真術に対する迷信が広まるということもあったが，明治維新後の文明開化による意識の変化に伴って写真もようやく受け入れられるようになった。社会の変化に伴う技術革新により，明治 20 年代後半以後は容易な乾板写真が普及し，各地に次々と写真館が開業された結果，同業者間での競争が激しくなり，撮影料金が相対的に下がったおかげで，以前は上流階層のみの利用であった写真が中流階級にも身近なものとして広まった。また当時人気の高かった名所の風景や，高官・役者・芸者などの肖像写真を売る店も増えた。撮影が楽になったためにアマチュア写真愛好者も誕生し，富豪や知識人の間には写真を楽しむ者も現れ，こうしたアマチュア写真家は営業写真師とは別に，芸術写真を追求し始めた。

写真館の全盛時代，特に明治 30 年代においては，写真館の仕事の中心は肖像写真や記念写真の撮影であった。人々は特に人生の節目であるお宮参り・七五三・入学式・卒業式・結婚・出征時などの記念行事の際に写真に収まるようになった。着飾って写真館を訪れる人々は，自分の姿を写真に残すことに喜びや誇りを覚えていたに違いない。

また幕末から明治 30 年代にかけて，横浜の写真館では，肖像写真以外に日本の風景や風俗等を写真に撮り，手彩色を施してアルバムに収められて外国人旅客向けの土産として販売しており「横浜写真」と呼ばれたが，その後，写真製版技術の普及によって明治 30 年代以後は衰退した。また明治 33 年（1900）に私製絵はがきの使用が許可されると様々な絵はがきが作られるようになり，明治 37 年（1904）の日露戦争の際には，日本中で観光地の風景や美人写真等の絵はがきが大ブームとなった。

## 2. 最初の女性写真師達

日本の草分け期の写真師を取り上げている事典や文献[9] について調べ，日本最初の写真史家である梅本貞雄による『日本写真界の物故功労者顕彰録』をはじめ，他の研究書の記載事項も参照することで知り得た幕末・明治期の女性写真師の中から，主な人物について以下に述べて

9） 女性写真師に関する情報は次の資料を参照した。梅本（1952）（再録：東京都写真美術館編（2007：45-86（1-45）），横田監修（1989:1-16）「幕末･明治の写真師小辞典」，東京都写真美術館監修（2005）『日本の写真家』，井桜直美・トーリン・ボイド（2000），東京都写真美術館執筆・監修（2000）『日本写真家事典』，桑田（島岡編）（1998）［復刻版］，井上（1989：74-76），亀井編（1997：173-188），梅本（緒川編）（2014：373-380）。

みる。

日本初の女性写真師は，上野国桐生（現群馬県桐生市）出身の島隆[10]（Shima Ryu）（文政 6 ～明治 32 年（1823-1899））と言われている。幕末に女性で写真撮影を行ったのは，島隆だけであった。隆は安政 2 年（1855）に画家・洋学者であった島霞谷（文政 10 ～明治 3 年（1827-1870））と結婚し，夫と共に幕末の文久 2 年（1862）頃に江戸下谷久保町に写真館を開いた。霞谷は明治 2 年（1869）に大学東校（東京大学医学部の前身）に就職し，明治 3 年（1870）に医学書に用いる独自の鋳造活字を開発したが，その後間もなく亡くなった。霞谷と隆がどのようにして写真術を習得したかについては不明であるが，一説には開港後，外国人から写真を習ったとも言われている。元治元年（1864），隆が霞谷を撮影した写真が残されており，隆は日本最初の女性写真師とされるようになった[11]。隆は霞谷の死後の明治3年（1870），郷里である現桐生市に戻り，明治 11 年（1878）頃に写真館を開業し，77 歳で亡くなっている。

塙芳野[12]（Hanawa Yoshino）（嘉永元～明治 17 年（1848-1884））は明治初期の女性写真師の 1 人であり，本名は大澤はまと伝えられている[13]。浅草の写真師北庭筑波の門下生として写真術を習得した塙芳野は，明治 9 年（1876）に東京築地の新富座裏に写真館を開業し，芝居専門の写真師として活躍した。写真館は歌舞伎役者などの撮影で繁盛していたようである。芳野は明治中期に，豊原国周によって「開花人情鏡写真」という錦絵に女性写真師として描かれている。36 歳で亡くなっている。

亀谷とよ[14]（Kametani Toyo）は嘉永 5 年（1852）に長崎で生まれた。上野彦鳥の門人であった父の亀谷徳次郎[15]が，京都知恩寺境内で営業していた写真館を幼少時から手伝い，その後，郷里長崎で父とともに写真館を営業し，明治 4 年（1871）に吉井禎次郎を養子に迎えている。のちに禎次郎は，写真師として朝鮮で開業したが，明治 18 年（1885）に亡くなり，とよはその後故郷に戻って，晩年を長崎で過ごしたようである。

三輪歌女[16]（Miwa Uta）は京都の三本木の舞妓として有名であったが，父，松兵衛が明治 2

---

10） 島隆と島霞谷に関しては，村上（2019），亀井編「前掲書」（174-180），東京都写真美術館監修「前掲書」（2005:208-209），群馬県立歴史博物館（2007），東京都写真美術館，北海道立函館美術館編『写真渡来のころ』展図録（1997：98-116），横田監修「前掲書」（7-8）など。

11） 昭和 63 年（1988），桐生市内で幕末から明治にかけての油絵・写真作品と関係記録が発見され，幕末の写真師で画家の島霞谷と妻隆の存在が明らかとなった。

12） 東京都写真美術館監修「前掲書」（2005：328），亀井編「前掲書」（180-182），井上「前掲書」（74-75）など。

13） 亀井編「同書」（182）。

14） 梅本（緒川編）「前掲書」（373-380），井上「前掲書」（76），亀井編「同書」（185）など。

15） 亀谷徳次郎（文政 9～明治 18 年（1826-1884））。梅本「前掲書」（2007：76（11））。

16） 梅本「同書」（2007：53（34）），横田監修「前掲書」（15）。桑田（島岡編）「前掲書」（40），亀井編「前掲書」（185），井上「前掲書」（75-76）など。

年（1869）に写真館を開業した際に父のもとに戻り，父の仕事を手伝いながら写真術を習得し，女性写真師として名声を得て活躍した。彼女の門下からは多数の優れた写真師が誕生した。

今回参照した文献の中には，以上に述べた女性写真師以外にも女性写真師の名前が見られたが，詳細があまり記されていないため，ここでは数名を紹介するに留めることにする。

三崎栄女[17]（Misaki Eijo）は，科学者の矢田太郎に写真技術を学んだ夫の吉兵衛が，明治3年（1870）に京都に写真館を開いた際に，夫を手伝いながら写真術を習得したと言われている。

井上さと[18]（Inoue Sato）は，高知の写真師の草分けと言われる井上俊三（天保5～明治40年（1834-1907））の妻であった。井上俊三は明治2年（1869）頃に開業した上野彦馬の門人であり，さとは夫を助けて撮影に従事した。女写真師として人気を博したようである。

山本古登[19]（Yamamoto Koto）は東京で明治8年（1875）に写場を開いた。古登は撮影に際して客のために衣服を数多く準備したので，客は好みの衣装を着て撮影に臨む事が出来て評判になったと伝わっている。

前述の通り，ここに紹介したのはごく一部であり，当時，写真師として活躍した女性は他にも存在していたことが分かっている[20]。

以上の女性達は，難しい写真術を習得した初めての女性写真師として，幕末から明治初期にかけて東京（江戸）や長崎，京都などで活躍した。多くは既に写真術を身につけていた父親や夫，あるいは修業先の写真館の師匠から教えを受けられる環境にあった女性達であり経済的にも恵まれていたと思われる。激動の時代に活躍した彼女たちは，周囲から先進的な女性と見なされていたに違いない。

次に当時の東北地方，青森県弘前市と山形県酒田市における写真の普及の様子と，それぞれの町に誕生した女性写真師に注目してみたい。

## Ⅱ．弘前市と酒田市の最初の写真館と女性写真師の誕生

### 1．明治時代の弘前と酒田の様子

明治維新で近代国家建設を目指した新政府は，西洋先進諸国の制度や産業・技術などを積極的に導入し，文明開化のシンボルとして国内各地に橋や新しい道路等を敷設し，多くの公共建

---

17）井上「同書」（75-76），亀井編「前掲書」（185）など。

18）井上「同書」（76），亀井編「同書」（185）など。

19）井上「同書」（76），亀井編「同書」（185）など。

20）参照した文献の中にはさらに他の女性写真師の名前が見られた。東京京橋新富町の新井田トミ，新潟市の和田姉妹（ゆき・つめ），信州の女性写真師の草分けと思われる中野巨斗女，小田原市の五十嵐ハルなどである。また本論文に取り上げた弘前の矢川写真館を開業した矢川姉妹（蓮・美喜）の名前が記されている（東京都写真美術館監修「前掲書」（2005：408））。

築物，学校，大学，病院，工場，銀行などを建設した。その多くが西洋建築に影響を受けた大きな建造物であることが特徴的であった。

今回焦点を当てた東北地方の2つの町，弘前と酒田も，全国的な文明開化の浸透により表情を一変させた。

弘前藩の城下町として栄えた弘前[21]は，明治維新後に激変の時期を迎えた。明治4年（1871）7月，廃藩置県によって弘前藩は弘前県となったが，同年9月には青森県と改称された。その後，慶長16年（1611）に建てられた鶴ヶ丘城は明治4年（1871）に廃城となり，旧士族の生活は次第に苦しくなり，長年にわたって商工業者に重大な影響を与えた。しかし明治22年（1889）に市町村制が実施され，青森県の最初の市として弘前市が誕生すると，明治27年（1894）には弘前・青森間に国営鉄道が開通し，明治30年（1897）には第八師団司令部が設置され，次第に商工業界の競争が激化することで弘前の町に再び大きな活力を与えるようになった。それに伴い，学校・市役所・キリスト教会・銀行等，洋風建築が増加し，街の様子はすっかり変わっていった。廃城になっていた鶴ヶ丘城は明治28年（1895）に市民の公園になった。

江戸時代，庄内藩に属していた酒田[22]は，商業の町として発展してきた。海上や河川による水運が発達し，米や紅花などの積出し港として繁栄した。明治4年（1871）の廃藩置県で酒田県となるが，明治8年（1875）に廃止されて翌年，山形県と改称された。その後，明治12年（1879）に県令三島通庸[23]の政策のもと，洋風三階建ての飽海郡役所，さらに当時山形県内で最大規模の学校であった飽海郡琢成学校が建てられた他，新しい建築物が次々と出現した。しかし明治27（1894）年10月に庄内地方を襲った大地震とそれに伴う大規模な火災により，酒田の町は港をはじめとして甚大な被害を蒙った。経済的，社会的に大打撃を受けたこの地方も，明治30年代になると様々な産業が発展して商業界も徐々に活気を取り戻し，商売が賑わうようになった。大正3年（1914）には酒田駅が開業している。

また西洋文化の導入によって商業の面にも変化が見られ，それぞれの町に新しい職業・商売が生まれ，時計屋，写真屋，洋服屋，メガネ屋，理容店，靴屋，洋菓子店，パン屋，ガラス職人等が出現したが，藩政時代から存続する商売や手工業には大きな変化は見られなかった。日常生活においては衣服に変化が現れ，それは男性の服装においてより顕著であり，軍人や公務員はいち早く洋装を取り入れ，髪を短く刈ったりした。一方で女性は，従来通り長い髪を結い和服を着るのが一般的であった。このように市街地が様変わりしていったのに対し，近隣の農

21）「新編弘前市史」編纂委員会編（2005：128-208）。

22）酒田市史編纂委員会編（1995：296-332）。

23）県令三島通庸（天保6～明治21年（1835-1888））は近代的な道路開発や洋風建築などを導入し，山形県の近代化に大きく貢献した人物である。庄内人名辞典刊行会編（1986：604）。

村には大きな変化は見られず，多くの農民は相変わらず貧しい生活を送っていた。東北地方の他の農村地域についても事情は同じであった。

明治維新をきっかけにあらゆる面で変遷を遂げた明治時代にあって，新政府は富国強兵政策を進め，明治 27 年（1894）に日清戦争，明治 37 年（1904）には日露戦争も勃発した。また水害や地震などの自然災害，そして度重なる火災に苦しんだ時代でもあった。

この激動の時代に，弘前と酒田に新しい商売として写真館が登場したのである。

## 2. 営業写真館の登場：弘前の場合

### 2.1 最初の営業写真館

弘前では，明治28年（1895）にすでに3軒の写真館が営業していたと伝えられている[24]。最初の営業写真館[25]は，旧弘前藩士であった田井晨善（市之丞[26]）（弘化2年～明治23年（1845-1890））によって明治 4 年（1871），弘前下白銀町に開業された田井写真館であり，青森県初の営業写真館となった。晨善は明治 2 年（1869），25 歳の時に藩令[27]により東京と横浜で写真術を修業することになり，特に東京では有名な内田九一[28]の弟子として写真術を習得した。しかし明治 4 年（1871））の廃藩置県により，藩から支給されていた学費が打ち切られたために帰郷し，直ちに下白銀町の実家で27歳の時，写真屋（写場）を開いた[29]。翌年に結婚し妻となっ

24）『鷹ヶ丘城（一名弘前案内記）』（明治 28 年（1895：64））によると，弘前には 3 軒の写真館があったとされ，田井市雄（一番町），矢川美喜（下白銀町），神忍（元寺町）の名前が記されている。

25） 本研究の弘前における最初の写真館の歴史に関しては，最も詳しいと思われる『青森県の写真事始』（船水清）（1977）を主に参照した。この本の存在がなければ，情報はほとんど得られなかったと思われる。それ以外では当時の雑誌や書物，当時撮影された写真から情報を得た他，明治時代から営業し続けている弘前の矢川写真館からも情報をいただいた。

26） 田井晨善については，船水「前掲書」（59-89/144-147）。

27） 弘前藩の知識人であった兼松石居や佐々木元俊らが横山松三郎から写真を見せられたことが契機となり，弘前藩の重臣たちも写真の持つ記録性の重要さに大いに注目し，藩中でも写真術を取り入れる必要があると強く進言した。その後は直ちにその案は採用され，藩中で写真に関する知識を持つ人を探したところ，もと江戸定府藩士であった田井隼人が写真術に詳しいことがわかった。隼人は藩から写真修業のため上京するよう依頼されたが，既に 60 歳を超えていたので，自分の代わりに長男の市之丞（廃藩後，晨善と改名した）を推薦した。船水「同書」（66-67）。

28） 船水「同書」（70-72）。内田九一（弘化元年～明治 8 年）（1844-1875）は慶応 2 年（1865），横浜の馬車道で開業後，明治 2 年（1869），東京に進出し，浅草代地に写場（九一堂万寿）を開業した。当時唯一の洋式写場として話題になり，明治 5 年（1872）には明治天皇の最初の公式写真撮影を拝命，東京一の評判となったが明治 8 年（1875）に急死した。東京都写真美術館監修「前掲書」（2005：68-69）。また内田九一については，森重（2019：147-294）など。

29） 写真業は新しい商売であり，営業は大変であったが，近くに明治 5 年（1872），外国人教師を雇った東奥義塾が開学し，賑やかになった。船水「同書」（74, 81, 82）。

たしう[30]は，晨善から写真術を熱心に学び，のちに矢川姉妹に大きな影響を与えることになる人物である。青森県での草分けとして田井写真館の評判は高かったが，晨善は明治 23 年（1890）に 46 歳で病死，その後，母しうに写真術を学んだ長男市雄（明治 6 年～昭和 14 年（1873-1939））が写真館を引き継ぎ，しうと共に写真館の営業を続けた（写真 1）。日清戦争が始まった明治 27 年（1894）の末に，弘前・青森間の鉄道開通により賑やかになった一番町に進出した（資料 1，写真 2）が，明治 34 年（1901）に水戸に移って開業したため弘前の田井写真館は幕を下ろすことになった。弘前で最も早く誕生した田井写真館が，この地方における写真の普及に大きな役割を果たしたことについては，後に述べることにする。また夫の仕事を熱心に支え続けた妻しうの功績についても後に触れたい。

左から右へ

写真 1.「女性像」台紙の表と裏面：田井写真館，下白銀町，明治 24 年（1891）。青森県所蔵県史編さん資料（青森県史デジタルアーカイブスより）。（台紙裏面の上方に長男田井市雄の名前が記されているが，下方には写真師の名前はローマ字で S. Tai となっている。母親しうの名前の頭文字であると考えられる。）

資料 1.「玉真舘」（田井写真館の支店）の広告。明治 27 年（1894）。一番町に開店した時と思われる。『弘前名勝案内（一名旅客案内）』，佐藤良之助編，文栄堂，明治 27 年（1894：23）。弘前市立弘前図書館所蔵。

写真 2.「家族像」台紙の表と裏面：「玉真舘」一番町支店，I. Tai（表面），S. Tai（裏面），明治 27 ～ 34 年（1894-1901）。青森県所蔵県史編さん資料（青森県史デジタルアーカイブスより）。

明治 14 年（1881），開業から 10 年を迎えた田井写真館の経営が安定した頃，近所に住む矢川姉妹が新たな写真館を開設した。その 10 年後，明治 24 年（1891）に神忍[31]という人物が，塩分町の実家で新たに弘前では 3 番目となる神写真館を開いた。以後，日清戦争を経て日露戦争が始まるまでの間，この 3 軒の写真館が弘前市内で競い合うことになった[32]。神忍は，旧弘前藩士，成田求馬の次男，成田徳蔵（慶応元～昭和 15 年（1865-1940））のことで，明治 13 年（1880）に 16 歳で田井写真館に弟子として入った[33]。明治 19 年（1886）に 22 歳で写真術を磨

30） 船水「同書」（74/82）。しうは周とも書く。「同書」（74）。

31） 神忍に関しては，船水「同書」（117-126/148-151）。

32） 船水「同書」（117）。

33） 徳蔵は明治 15 年（1882）に親類の神鉄郎家が絶家に瀕したため，同家を相続し，名前を変えて神

くために上京し，明治 24 年（1891）に帰郷するまで浅草の福田写真館[34]で修業した。当時，写真界が湿板から乾板へ移った時代にいち早く乾板の技術を身に付け，弘前の塩分町で神写真館を開業したのである。明治 27 年（1894）に元寺町（写真 3）に移転したが，明治 28 年（1895），日清戦争後に青森県最初の従軍写真師（台湾）となり多忙となったため，青森の中西写真館[35]で修業していた師匠田井晨善の次男寿[36]に神写真館を手伝ってもらうことになった。当時は多くの弟子がいた様である[37]。日露戦争中の明治37年（1904）に元寺町の写真館が火災に遭ったため本町で新たに開業したが，寿が昭和 12 年（1937），神が昭和 15 年（1940）に亡くなり，弘前の神写真館も幕を閉じることになった。

写真 3.「女性 3 人像」台紙の表と裏面：神忍，元寺町，明治 37 年（1904）。筆者所蔵。

明治 31 年（1898）の『鷹ケ丘城（一名弘前案内記）』[38]によれば，弘前で活躍していた写真師，田井市雄（一番町），矢川美喜（下白銀町），神忍（元寺町）の写真館の他に，築舘写真館（北新寺町），大森写真館（桶屋町）という 2 軒の写真館の名前が記されているが，詳しい情報を得る事は出来なかった。

明治 30 年代には多くの写真館が存在するようになり，競争の時代となるが，これは弘前に限らず，全国的な傾向であった。各々の師匠のもとで写真術を習得した人達が次々と自分の写真館を開業し始めたからである。当時，写真の需要が増える中，弘前では明治 30 年（1897）

忍になった。船水「同書」（119）。

34） 田井晨善は取引していた東京の日本橋の写真材料商小西六に，忍が修業できる写真館の紹介を依頼し，当時繁盛していた浅草の福田写真館を推薦してもらった。船水「同書」（119–120）。福田写真館の詳細は不明であるが当時，東京浅草公園で福田亮正が開業した写真館と思われる。

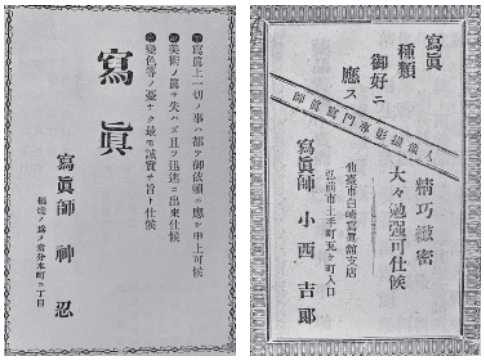
35） 中西美暢は東京で 5 年間写真修行した後，明治 12 年（1879），青森塩町に写真館を開業した。船水「同書」（85）。

36） 田井寿は明治 38 年（1905）に坪田家の婿養子となり，坪田寿になった。船水「同書」（150）。

37） 船水「同書」（174, 176）（写真：神写真館の人びと）。

38） 『鷹ケ丘城（一名弘前案内記）』（明治 31 年（1898：50））。

に第八師団司令部が設置されたことにより，以後軍人を顧客とする新商売として，写真館は大いに繁盛した。明治37年（1904）の『弘前案内』[39] にも写真館の名前が記載されているが，前述の新しい2軒の写真館の名前は消え，代わりに斎藤蔦一の斎藤写真館（山道町）と小西吉郎（または小西吉十郎）の小西写真館（瓦ケ町）の新しい2軒が加わっている。明治34年（1901））に田井市雄が水戸へ転居したため，田井写真館の名前は消えている。明治37年（1904）の『弘前案内』には神写真館と小西写真館の広告が掲載されており，当時の同業者間の競争の激しさを示している（資料2）。




資料2.「神写真館」と「小西写真館」の広告より。『弘前案内』，蒔笛三郎編，明治37年（1904）。弘前市立弘前図書館所蔵。

明治30年代前半には斎藤蔦一も山道町に写真館を開業しており，明治33年（1900）に撮影された写真台紙には写真館の名前が記されている（写真4）。

小西写真館は，小西吉郎が仙台の恩師であった白崎民治[40] の写真館の支店として土手町（あるいは瓦ケ町）で営業していた（写真5）。小西が撮影した写真台紙には小西吉郎と記されているが，明治44年（1911）の『弘前案内』[41] には同住所（土手町）に小西吉十郎の名前があり，こちらが本名であるかどうかは不明である。船水（1977）によれば，本館は瓦ケ町，分館は旧大円寺辻通りにあったという。明治40年代に入ると全国的に不景気となり，青森県の写真館もその影響を受け営業が厳しくなった。小西写真館は東京へ移転する予定であったが，分館を売りに出して当市に留まることになった[42]。

39）『弘前案内』（明治37年（1904：44））。当時，矢川写真館（美希夫妻）は大工町，神写真館は本町2丁目に開業していた。

40）横田監修「前掲書」（7）。

41）『弘前案内』（明治44年（1911：51））。

42）船水「前掲書」（175-176）。

写真 4.「家族像」台紙の表と裏面：斎藤蔦一，山道町，明治 33 年（1900）。筆者所蔵。
5.「女性 3 人像」台紙の表と裏面：小西吉郎，土手町，明治 30 年代（1897-1906）頃。筆者所蔵。

その他にもいくつかの写真館が存在していた可能性がある。明治 44 年（1911）の『鷹ヶ丘城（弘前案内記）』[43] には矢川友弥（矢川美希の夫）（本町 356），神忍（本町 123），小西吉十郎（土手町 117）が営業していたと書かれているが，同年の『弘前案内』[44] には矢川写真館（蓮の写真館）（白銀町），神忍（本町），小西吉十郎（土手町），長谷川写真館（長谷川誠）（本町）が営業していたとある。しかし長谷川写真館に関する情報はない。大正 4 年（1915）の『鷹ヶ丘城（弘前案内記）』[45] には，矢川友弥（本町 356），神忍（本町 123），小西吉十郎（土手町 117）の名前と共に，新しく高橋写真館（鞘師町）の名も記されている。ただ必ずしも当時の営業写真館全ての名が記されていたとは限らないので，他にも営業していた写真館があったことは否定できない。矢川蓮の写真館（矢川写真館）も掲載されてはいないものの当時営業しており，撮影された写真も残っている。

### 2.2　最初の女性写真師・矢川姉妹の「矢川写真館」

矢川姉妹[46] が弘前の下白銀町で写真館を開いたのは明治 14 年[47]（1881）であり，弘前では 2 軒目の写真館であった。当時は写真を撮ることが，特に経済的・技術的な面ではまだ大変困難な時代であった。また全国的に女性写真師は珍しく，しかも当時，蓮（文久元～昭和 20 年（1861-1945））は 21 歳，美喜（明治元～昭和 20 年（1868-1945））は 14 歳という若さであった。旧弘前藩士であった父，矢川蕃寛が先進的な事業者で写真の将来性を確信し，娘たちを応援し

43）『鷹ヶ丘城（弘前案内記）』（明治 44 年（1911：49））。
44）『弘前案内』（明治 44 年（1911：51-52））。
45）『鷹ヶ丘城（弘前案内記）』（大正 4 年（1915：104））。
46）矢川写真館に関しては，船水「前掲書」（90-101/151-161），東奥日報社編（2002：694-695），東奥日報社（2017：232-233），東奥日報社（1968：194-195），青森県女性編さん委員会編（1999：22）など。
47）明治 14 年（1881）は弘前の明治天皇巡幸の年であった。

たのだった。矢川家は明治 7 年（1874）に長坂町から下白銀町に越してきたが，すぐ近所に前述の明治 4 年（1871）に開業した弘前初の田井写真館があり，矢川姉妹は幼い頃から田井家に出入りしていた。当時，屋外でのみ可能であった写真撮影は姉妹にとって珍しい光景で，興味を抱くようになった。その頃夫の仕事を支えていた田井晨善の妻しうは，幼い子供や年老いた夫の両親の世話に追われて多忙を極めていたため，次第に矢川姉妹に自分に代わって夫晨善の助手を任せるようになった。しうは函館で写真の修正術を習得しており，主に美喜にその技術を伝えた[48]。姉妹は田井写真館を手伝いながら，しうの指導のもとに写真術を身に付けており，しうの存在は矢川姉妹の将来に大きな影響を与えたと言える。その後，恐らく明治 13 年（1880）末頃に，写真の将来性を確信した姉妹の父親は，彼女たちを東京や横浜に連れて行き，特に江崎令二[49]の写真館を見学させ，写真機なども購入したようである[50]。

明治 14 年（1881），姉妹が自宅で写真館を開業する際，田井家はすぐ近所で同じ商売を営んでいたにもかかわらず大変喜び，必要な機材の面でも協力したと伝わっている。特に姉妹を可愛がっていたしうは積極的に 2 人を応援し，その後も両家は非常に親しい関係を保ち続けたという。このような関係から，船水（1977）が指摘するように，田井家は弟子への暖簾分けのようなかたちで矢川家の娘たちを援助したと考えられる[51]。両館は忙しい時にはお互いに協力し合い，ますます繁盛していった。明治 23 年（1890）に田井晨善が病死した後も，姉妹は変わらず田井家に協力し続けた[52]。写真 6 は開業から 3 年後，明治 17 年（1884）に矢川写真館で撮影されたもので，彼女たちの高い技術力を証明する非常に貴重な 1 枚である。

矢川姉妹は下白銀町で開業後，「女（おなご）写真屋」[53]と呼ばれて評判になった。2 人は最初，矢川写真館の名前で写真を撮影していたと思われるが，のちに写真師として，それぞれの名前を用いて活躍していたようで，写真台紙には「矢川禮舞」「矢川蓮」，また「矢川美喜」「矢川みき」「矢川幹」という表記がある（写真 7–10）。

美喜は弘前出身の日本画家であった岩川友弥[54]（明治 7 ～昭和 23 年（1874–1948））を婿養子として迎え，分家となった。明治 36 年（1903）に本町で夫と共に「M 矢川写真館」を開業した（写真 11, 12）。下白銀町の写真館は蓮の名義になったが，彼女は体が弱かったので美喜が

48） 船水「前掲書」（99）。

49） 江崎令二（弘化 2– 明治 43 年（1845–1910））は明治 16 年（1883）に当時最新の乾板写真法での撮影に成功した。船水「同書」（97）。また東京都写真美術館監修「前掲書」（2005：76, 77）など。

50） 船水「前掲書」（97–98）。

51） 船水「同書」（100）。

52） 船水「同書」（101）。

53） 船水「同書」（100）。

54） 友弥の画号が芳雲である。写真術と絵画技法を組み合わせた肖像画が評判になった。船水「同書」（151–156）。

写真 6.「和服の女性像」（湿板写真）。矢川写真館，下白銀町，明治 17 年（1884）3 月 3 日。矢川写真館所蔵。

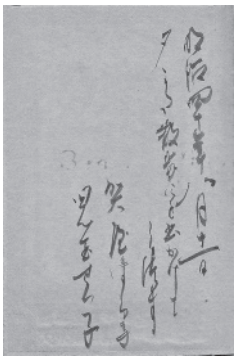
左から右へ

写真 7.「兄弟像」台紙の表と裏面：矢川蓮（Yagawa Ren）「矢川禮舞」（R. Yagawa），下白銀町，明治 28 ～ 36 年（1895-1903）頃。筆者所蔵。

8.「青年 2 人像」台紙の表と裏面：矢川蓮（Yagawa Ren）「矢川禮舞」（R. Yagawa），下白銀町，明治 28 ～ 36 年（1895-1903）頃。筆者所蔵。

9.「若い女性像」台紙の表と裏面：矢川美喜（Yagawa Miki），下白銀町，明治 26 ～ 28 年（1893-1895）頃。青森県所蔵県史編さん資料（青森県史デジタルアーカイブスより）。

10.「若い男性像」台紙の表と裏面：矢川美喜（M. Yagawa）（矢川幹）（Yagawa Miki），下白銀町，明治 28 ～ 36 年（1895-1903）頃。筆者所蔵。



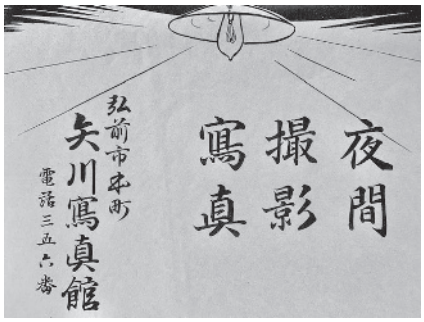



写真 11.「男性像」台紙の表と裏面：矢川美喜（M. Yagawa）（矢川みき），本町，明治 36 ～ 39 年（1903-1906）頃。筆者所蔵。

12.「若い女性 2 人像」台紙の表と裏面：矢川写真館（M. Yagawa），本町，明治 40 年（1907）。筆者所蔵。

資料 3. 矢川写真館の広告より。『鷹ヶ丘城（弘前案内記）』，成田果編，明治 44 年（1911），5 版。弘前市立弘前図書館所蔵。

必要な時に姉を手伝った。また長年の弟子亀山喜三郎[55] の協力もあり，蓮は写真館の営業を続けることが出来た。友弥は妻，美喜に習った写真術を熱心に研究し，明治 42 年（1909）に閃光器を利用して青森県では初となる夜間撮影を開始して注目を集めた（資料 3）。

美喜夫妻は大正 7 年（1918）に代官町に移転し，大火災で一度は全焼した写真館を復興させている。蓮と美喜は昭和 20 年（1945），半年の間に相次いで亡くなり，昭和 23 年（1948）に友弥も世を去った。美喜夫妻の 3 男であった友三[56]（明治 45 ～平成 7 年（1912-1995））が写真館を継いだが，後継のない蓮の写真館は幕を下ろした。美喜夫妻の写真館は現在でも同じ代官町で子孫によって営業が続けられている。蓮と美喜が矢川写真館を開業してから，140 年以上にわたって，この地域の人たちの肖像写真がここで撮影されてきたことになる。

55） 船水「同書」（178-179）。

56） 東奥日報社編「前掲書」（2002：694）。

## 3. 営業写真館の登場：酒田の場合

### 3.1　最初の営業写真館

酒田では明治時代の写真館の数を正確に特定することは困難である。当時営業していた写真館は全てかなり以前に廃業しており，また町は度重なる災害に見舞われているからである。中でも明治 27 年（1894）の庄内地震と昭和 51 年（1976）の大火による被害は甚大で，多くの写真と関連資料などが焼失したと考えられる。現地資料[57]によると，酒田に最初の写真館が登場したのは明治 10 年代と思われるが，隣接する城下町鶴岡[58]には既に明治 4 年（1871）に開業していた写真館があるので，酒田は鶴岡より少し遅れたことになる。ただ当時，酒田は繁栄した港町であり，資料に残る写真館の開業以前に既に写真が導入されていたと思われる。それを裏付けるものとして，地元の写真師による撮影ではないが明治 9 年（1876）に酒田の小幡嘉兵エ宅で撮られた写真が存在する（写真 13）。

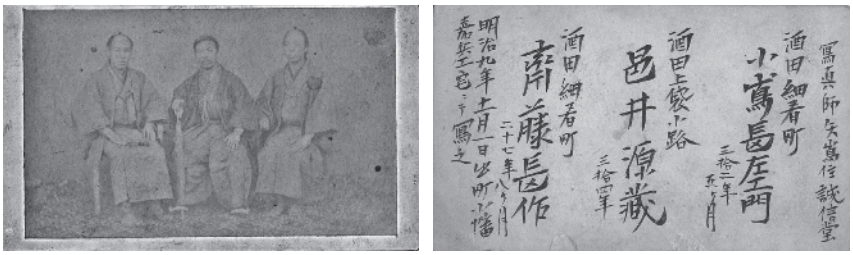



写真 13.「男性３人像」台紙の表と裏面：写真師矢蔦，誠信堂。酒田町出町，小幡嘉兵エ宅にて，明治９年（1876）11 月１日。筆者所蔵。（この写真によると，明治４年（1871）に散髪令の布告があり，明治６年（1873）に明治天皇も断髪したが，「ちょんまげ」はすぐには完全に無くならなかったようである。また小幡嘉兵エ氏は同年，酒田港を見下ろす日和山の頂上に「小幡」という料亭を開業しており，この写真はそこで撮影されたと思われる。料亭「小幡」はその後，高名な政治家や多くの文人墨客などが足跡を残した酒田の名所になった）。

調査[59]の結果分かったかぎりでは，酒田で初めて開業した写真師は次の通りである。

白崎民治[60]は東京で写真術を学んだ後，明治 13 ～ 15 年（1880-1882）頃に酒田港の近くで開業しており，明治15年（1882）には酒田港内匠町に民治の写真館が存在したとされる[61]。民治は安政 4 年（1857）に酒田で生まれ，生家は呉服商であったようである。明治 21 年（1888）

57）　酒田における初めての写真館の歴史に関する資料は数少ない。酒田市史編纂委員会（1978：4-6/29），酒田市史編纂委員会「前掲書」（1995：330），平井（2013：69-70）などを参照した。また当時の様々な資料や雑誌等も参考になった。当時撮影された多くの写真を検討しながら情報も得た。

58）「寛明堂」は旧荘内藩士であった加藤正寛（文政 10 年～明治 35 年（1827-1902））によって開業された。ガボリオ「前掲書」（8-9）。

59）　酒田の最初の営業写真館の詳細に関しては，ガボリオ「同書」（13-19）。

60）　横田監修「前掲書」（8），東京都写真美術館監修「前掲書」（2005：218），桑田（島岡編）「前掲書」（30-31）［復刻版］。

61）　平井「前掲書」（69），菊地東陽先生伝記編纂会編（1941：49-50）。

頃に仙台へ移ったと伝えられているが，その後の明治 22 年（1889）頃の写真台紙の裏面の情報には酒田町酒田港下内となっており，しばらく酒田でも写真館を営業していたと思われる（写真 14, 15）。民治は才能に恵まれていただけでなく，仙台に移ってから後，さらに熱心に写真技術を学んでおり，また自分の後継として東北地方出身の多くの写真師も育てている（写真 16）。前述のように弟子の一人であった小西吉郎は，明治 30 年代に青森県弘前において白崎民治の支店を営業していた。

写真 14. 台紙の裏面（拡大したもの）：白崎民治，酒田町・酒田港・下内。明治 22 年（1889）頃。筆者所蔵。（明治 22 年（1889）に酒田町となっているので明治 22 年の町村制施行直後と思われる。したがってこの写真が撮られた時期にはまだ酒田で写真館を営業していたと思われ，仙台に移り本格的に写真師として活躍する直前または直後であろうと考えられる。）

15.「男性像」台紙の表と裏面：白崎民治，仙台東一番，出張所 / 酒田港，明治 21 ～ 22 年（1888-1889）頃。筆者所蔵。（出張所として仙台の写真館の場所（一番丁）が記されているが，その下にはより太い文字で「酒田港」の文字が見え，この時期にはまだ酒田でも営業していたと考えられる。）

16. 台紙の裏面：白崎民治，仙台東壹番町，明治 30 年代頃。筆者所蔵。

家坂徳三郎（万延元年～昭和 12 年（1860-1937））も酒田で最初の写真師の一人であり，明治 18 年（1885）に，当時船場町の出町，酒田港の近くにあった自宅で「徳翠軒」を開いたと伝えられている。徳三郎は江戸末期に生まれ，豪商の家に育った。多くの肖像写真の他に，当時の酒田とその周辺の風景の非常に貴重な写真を数多く残した写真師である。写真館は彼の息子に引き継がれた（写真 17, 18）。

同じ頃，池田亀太郎[62]（文久 2 年～大正 14 年（1862-1925））が船場町に池田写真館を開業したと思われる。当時，この町で洋画の先駆者と言われた池田亀太郎は，当初，肖像画を描く目的のために写真を学んだと言われており，写真師としてより画家として活躍していたようで，油絵画家の高橋由一（文政 11 年～明治 27 年（1828-1894））の影響で鮭図を描いたものや，地

62） 横田監修「前掲書」(1)，東京都写真美術館監修「前掲書」(2005:22)，庄内人名辞典刊行会編「前掲書」(133)。

写真 17.「女性像」台紙の表と裏面：家坂徳三郎「徳翠軒」。酒田町出町，明治 20 年代後半頃。筆者所蔵。
18.「男性 2 人像」台紙の表と裏面：家坂徳三郎「徳翠軒」。酒田町出町，明治 38 年（1905）。筆者所蔵。

元名士の肖像画などを描いたものが残されている。写真館を継いだ息子の正吉が撮影した写真（大正年代の写真が多い）は現存するが，亀太郎自身が撮ったものは残念ながら 1 枚も確認出来なかった。

さらに「松山堂」も，酒田で最も古い写真館の 1 つであると思われる[63]。菊池某（K. Kikuchi）によって今町で開業されたが，明治 27 年（1894）の庄内大地震の際に廃業したようである[64]。現時点でそれ以上の情報はないが，この写真館で撮影された写真 19, 20 が写真館の存在を裏付けている。

その他に長谷川源次郎によって開かれた写真館がある。この写真師に関する情報も多くは存在しないが，明治 25 年（1892）に撮影された写真によって上台町で「長谷川写真館」が営業されていた事がわかる。その後，大正 3 年（1914）頃に下内匠町で写真館を営業したのち上京して写真術を学び，大正 8 年（1919）に酒田曲師町で再び写真館を開業したようである[65]（写真 21）。

明治 30 年代になって，秋田町に「美影堂」（佐藤兼吉），新町に「華影軒」（佐藤宗吉）という 2 つの新しい写真館が開業した。「美影堂」は明治 31 年（1898）の写真が存在することから正確な開業の時期は明治 30 年代初め頃と思われる（写真 22, 23）。

明治 30 年代後半にはこれらの写真館の間で競争が激化し，また大正時代に入ると，新しい写真館が加わり，競争はさらに激しくなっていった。

以上の写真師達と同時代に，女性写真師として酒田で活躍していたのが池田真佐である。

---

63） 平井「前掲書」（69）。

64） 酒田市史編さん委員会（1978：29）。平井「同書」（69-70）。

65）「酒田新聞」（大正 8 年（1919）5 月 20 日：1）。（長谷川写真館の広告による）。小野太右衛門所蔵。

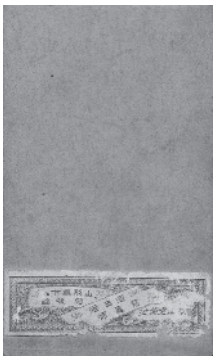


写真 19.「女性像」台紙の表と裏面：菊池某「松山堂」。明治 27 年以前（1894）。筆者所蔵。
20.「家族像」台紙の表面：菊池某（K. Kikuchi）「松山堂」。明治 27 年以前（1894）。筆者所蔵。

写真 21.「男性 2 人像」台紙の表と裏面：長谷川源次郎。明治 25 年（1892）。筆者所蔵。

写真 22.「若い女性 3 人像」台紙の表と裏面：「美影堂」。明治 32 年（1899）。筆者所蔵。
23.「帽子をかぶる和服の男性」台紙の表と裏面：「華影軒」。明治 30 年代後半頃。筆者所蔵。

3.2　最初の女性写真師・池田真佐の写真館「玉影館」

池田真佐は明治20年代中頃，下台町（現日吉町）に写真館を開業したと伝わり，のちに「玉影館」と名付けた。約10年前に登場する弘前の矢川姉妹同様，当時，特に地方の町で女性写真師が活躍するのは非常に珍しいことであった。

池田真佐に関する情報はほとんどないが，真佐の名前が入った写真は現在も多数残っており，写真館の存在を証明している。以下の現地資料で見つけたわずかな情報をもとに，当時の新聞や書物などから集めた情報も参考にして，写真館で撮ったとされる多くの写真を見ながら真佐と子孫の足跡を辿ってみた。

小山松勝一郎[66]によれば，真佐は進歩的な人間で，横浜で写真術を習い，帰郷後下台町（蓮向寺前）に写真屋を開き，尾関又兵衛家[67]（酒田の廻船問屋，酒田36人衆の一人）の又吉の弟・得郎と結婚したという。

また明治末期に「玉影館」を引き継ぐことになった若林安松（真佐の娘婿）については，以下の情報を入手することが出来た。

佐藤七郎『目で見る酒田市史』（1978）[68]によれば，安松と「玉影館」の出会いは明治27年（1894）10月22日の庄内大地震に遡るようである。震災状況の記録写真を撮影するために酒田に来ていた富山出身の若林安松は，撮った写真を現像する設備を求めて台町の「玉影館」に依頼したことがきっかけでその後，尾関家の一人娘と結婚することになった。

また高田可恒[69]によれば，安松は明治9年（1876）に富山県で生まれ，父親の若林快雪（天保14年～大正11年（1843-1922））は書家であった。安松は東京に出て，当時有数の写真師であった田中松太郎[70]に写真術を学んだ後，明治28年（1895），戦場（日清戦争）や風景などの写真を撮影していたが翌年帰郷し，明治30年（1897），酒田の「玉影館」に招かれて就職し，その後，写真館主の一人娘と結婚したという。

これまで調査したところでは，池田家と若林家に関する公文書[71]の情報に，「池田芳江という女性が明治27年（1894）に尾関得郎と結婚し，その娘，尾関竹代が写真師であった若林安松と結婚することになった」とあり，その後，写真館を引き継いだことがわかっている。池田

---

66）小山松（1972：84）。（小山松によると，真佐は本町一丁目池田家の娘であったようである。）

67）庄内人名辞典刊行会編「前掲書」（214）（214）。

68）酒田市史編纂委員会編「前掲書」（1978：29）。

69）高田（1909：201）。

70）田中松太郎（1863-1959）（文久3年～昭和34年），富山県出身。東京都写真美術館監修「前掲書」（2005：66），梅本「前掲書」（2007：66（21））。

71）若林家のご子孫と出会うチャンスがなければ，研究成果を得る事はできなかったと思われる。心から謝意を表したい。

真佐と池田芳江が同一人物であれば「真佐」の本名は「芳江」であるとも考えられる。池田芳江が尾関得郎と結婚したのは29歳で，既に18歳の時に産んだ11歳の娘・竹代（明治16年（1883）生まれ）がいた。2人が再婚であったかどうかは不明である。資料によれば，得郎は万延元年（1860）に尾関又兵衛の長男として生まれたが，明治12年（1879）[72] に分家となった。一方，「玉影館」に雇われていた写真師・若林安松[73] は，明治30年（1897）頃，おそらく写真術を磨くためにしばらく東京へ行き[74]，酒田に戻った後の明治34年（1901），池田真佐（または尾関芳江）の娘・尾関竹代と結婚し，ともに「玉影館」を営業したと思われる。

真佐が芳江と同一人物であるとすれば，慶応元年（1865），酒田近郊の村の裕福な農家の次男の長女として生まれたことになるが，尾関得郎と結婚する以前の情報がないために，彼女が何故写真師という職業を選んだのか，またいつ頃から写真との関わりを持ち始めたのか，どこで実際に写真術を習ったのかなど，全て不明である。ただ当時は，経済的に余裕がなければ，写真館を開くことが出来ない時代であったことは確かである。

地元の旧家の子孫[75] の方から，その家の長女であった佐江（明治7～昭和30年（1874–1955））が若い頃，近所の写真館で働く女性写真師の姿を見て憧れていたという話を伺った。当時の佐江の年齢を考えれば，真佐が写真館を構えた時期と重なり，その女性写真師は真佐のことと思われる。その後，佐江はおそらく真佐の影響で東京に写真術を習いに行き，入門した中島写真館[76] で宮内幸太郎[77] と出会って結婚し，東京で一緒に写真館を開業した。写真術を習得していた佐江は夫をよく支えたと考えられる。20世紀の世界的な写真家で，酒田出身の土門拳[78] は，昭和8年（1933）に母親が宮内家のお手伝いとして働いていた関係から，東京上野

---

72） 同年に（明治12年（1879））渡辺作左衛門が本町六丁目にある廻船問屋だった尾関又兵衛の家屋敷を買い入れた。明治14年（1881）の明治天皇東北巡幸の際に行在所に当てられた。

73） 高田「前掲書」（201），酒田市史編纂委員会編「前掲書」（1978：5/29）。

74） 公文書に当時の若林安松の東京の住所が掲載されている。

75） 宮内家と親戚である最上谷直義氏に多大なるご協力をいただいた。感謝の意を表したい。佐江さんは御祖父の御妹様であった。

76） 中島待乳は明治7年（1874），浅草の吾妻橋畔に写真館を開業し，のちに日本橋呉服町に移転した。日本における幻燈の普及に多大なる貢献をした人物として知られている。中島待乳の経歴は，梅本「前掲書」（2007：63（24）），横田監修「前掲書」（11–12），東京都写真美術館監修「前掲書」（2005：296）などを参照。

77） 宮内幸太郎（明治5～昭和14年（1872–1939））。伯父であった中島待乳から写真を学び，明治32年（1899），現在の東京都文京区湯島に「宮内幸太郎写真場」を開業した。宮内幸太郎氏は当時営業写真界の第一人者で，ドイツに留学し，帰国後東京美術大学の写真科の教授を平行して勤めた。梅本「同書」（2007：54（33）），横田監修「前掲書」（15），東京都写真美術館監修「同書」（2005：394–395）などを参照。

78） 土門拳（明治42～平成2年（1909–1990年））は昭和に活躍した日本の写真家であり，報道写真，庶民，寺院，仏像などを撮影し，第二次世界大戦後の日本を代表する写真家の1人とされる。故郷の

池之端にあった宮内写真館に入門した[79]。土門拳は，間接的にではあるが，池田真佐の存在があったからこそ写真の道を歩んだとも言える。

池田真佐が若林家と尾関家に関係していた証拠の１つとして，鶴岡市郷土資料館が所蔵している資料[80]の中のおそらく若林安松が尾関得郎または妻であった竹代に宛てたと考えられる書状が挙げられる。そこには尾関得郎の妻と思われる女性の退院後の様子が書かれており，その中にマサ（カタカナで）の名前が見られる。当時，東京滞在中に真佐は階段から落ちて怪我をしたが，病院で検査をした結果，大した事ではなかったと書かれている。また資料の中に，池田真佐・若林安松の名前が記された写真関係の機材や製品の注文書もある。

また，池田芳江の生家で若林安松と尾関家の写真が収められた写真アルバムを見ることが出来たが，それによると池田家と尾関家は親密に付き合っていたようである。中には若林安松の写真もあった。

女性写真師であった真佐の経歴を辿るには残された記録が不足していることは確かであるが，今回，本稿で示した資料から，真佐と芳江は同一人物ではないかという推論をひとまず立ててみた。

「玉影館」は真佐の娘夫婦が引き継ぎ，若林写真館として戦後まで続いている。この夫妻には６人の子供がおり，東京勤めの次男が家を継ぎ，写真館は三男が継ぐ予定であったが，東京の新聞社に入って報道写真家となった。芳江（真佐）は昭和４年（1929）に亡くなり，若林家に同居していた夫の得郎も昭和13年（1938）に，真佐の娘（安松の妻，竹代）は昭和23年（1948），そして安松は昭和33年（1958）にそれぞれ亡くなっている。こうして明治時代に酒田とその周辺の多くの住民の人生の様々な瞬間などを記録した写真館は二代で幕を下ろすことになったが，明治という新しい時代に女性写真師としてこの写真館を開き，70年以上にわたってこの地域の写真の発展に貢献した真佐の存在は特に大きいと言える。

「玉影館」で撮影された写真を入手した結果，その写真台紙から次の情報を得ることができた。写真の中でもっとも古いものは明治28年（1895）に撮られたもので，写真台紙の表面にローマ字でIkedamasa-sei，Sakataminatoとあり，さらに日本語で，酒田港，池田まさ製と記

---

酒田市には土門拳記念館がある。東京都写真美術館監修「前掲書」（2005：284-289），東京都写真美術館執筆・監修（2000：225）など。

79）　土門拳（酒田本の会編）（1983：75-76）。

80）　鶴岡市郷土資料館が所蔵している「阿部正己資料」の中にある574番の資料を参照した。
「又マサ事，本日東京内科病院ニ入院為致申候，右ハ神田錦町三丁目ニ設置致し候，（中略）。昨日も大学病院ニ連れて参り診察為致候処，矢張橋田学士と診断と相違無之候，二カイより落チ候節，背骨ヲ打チ，之レカ少々あしき処ノ由ニテ，格別動カヌケレバ苦痛無之候間，尚少シ動クトアシク相成，（後略）」。「阿部正己資料」574番より。

載されている。台紙の裏面には写真館に関する情報は何も記載されていない（写真 24, 25）。

写真 24.「和服姿の男性像」台紙の表と裏面：池田真佐（池田まさ）。明治 28 年（1895）。小野太右衛門所蔵。
25.「家族像」台紙の表面：池田真佐（池田まさ）。明治 31 年（1898）。筆者所蔵。

明治 32 ～ 33 年（1899-1900）頃には写真台紙のデザインが変更された写真が見られ，表面にローマ字で M. Ikeda，日本語で「玉影館」，池田真佐，酒田，と記されているが，写真台紙の裏面は新しいデザインになっており，S. Ikeda，池田製と記載されている。台紙の表と裏に記されている名前の頭文字がこの時期だけ違っているが，その変更の理由は不明である（写真 26）。

写真 26.「礼装の若い女性像」台紙の表と裏面：池田真佐「玉影館」（S. Ikeda）。明治 33 年（1900）。佐藤三郎旧蔵。

明治 34 ～ 35 年（1901-1902）頃に，写真台紙は再び新しいデザインになっている。（写真 27）。表面は先の台紙と同様であるが，裏面が別のデザインになっており，ローマ字で Ugosakata，Shimodaicho，日本語で，羽後酒田下台町，写真師，池田製と記されている。

明治 37 ～ 39 年（1904-1906）頃の写真台紙の裏面には，ローマ字で M. Ikeda，日本語で池田製，酒田港と記されており，デザインもまた新しくなっている（写真 28）。

写真 27.「男性 2 人像」台紙の表と裏面：池田真佐（M. Ikeda）「玉影館」。明治 35 年（1902）。筆者所蔵。
28.「母と娘たち像」台紙の表と裏面：池田真佐（M. Ikeda）「玉影館」。明治 37 年（1904）。筆者所蔵。

写真の中には，明治 38 年（1905）に「玉影館」で池田真佐（M. Ikeda）の名前で撮影されたもの以外に，若林安松の名前で撮影された写真も含まれていた（写真 29, 30）。

写真29.「母と娘像」台紙の表と裏面：池田真佐（M. Ikeda）「玉影館」。明治38年（1905）。筆者所蔵。
写真30.「男性像」台紙の表と裏面：Y. Wakabayashi「玉影館」。明治38年（1905）。筆者所蔵。

明治 40 年代の初めからは写真台紙の表面には若林安松の名しか見られなくなるが，写真には「玉影館」の記載があり，その頃に若林安松が写真館を継ぐことになったと思われる（写真 31）。

その後，大正 8 年（1919）頃に若林安松は，山王下の自宅で写真館を開業したようである。真佐の写真館は酒田では若林写真館と呼ばれていたようであるが，写真館には「玉影館」と記された額がいつも大切に飾られ，更に写真台紙の裏には「玉影館」の記載があることから，写真館の正式名称は池田真佐が名付けた「玉影館」であったと思われる（写真 32）。

写真 31.「女性 2 人像」台紙の表面：Y. Wakabayashi「玉影館」。明治 41 年（1908）。筆者所蔵。

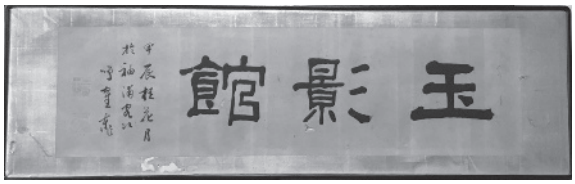



写真 32.「玉影館」と記された額。若林愛子所蔵。

## Ⅲ.「玉影館」と「矢川写真館」で撮影された女学生の肖像

明治 30 年代になると，特に富裕層の間で家族や子供達の大切な人生の節目を記念して写真館で写真を撮影することが流行し，写真業は繁盛するようになった。当時撮影された写真は知人・友人・家族などの間で交換されたり，大切な家族の歴史の記録としてアルバムに収められたりした。

当時の残された写真の中には，家族写真，軍人・芸者の写真，学校での集合写真等の他に，女学生の肖像写真も数多くあった。まだ「職業婦人」が極めて少なかった時代に，袴姿に西洋風の束髪をリボンで飾り，教養豊かで活動的な女学生は，新時代を生きる女性の象徴として新聞や雑誌などで注目を集める存在であった。明治後期には，尋常小学校を卒業後，男子は旧制中学校，女子は高等女学校に進学することが出来たが，実際に進学したのは多くが経済力のある家庭の子女であり，特に女子の進学率は低かった。明治 32 年（1899），高等女学校令によって女学生の数は全国的に増えるが，それでもまだ少数であり，多くの同年代の女子にとって女学校は相変わらず手の届かない世界であった。今回，酒田と弘前で撮影された写真の中から興味深い数枚を取り上げ，それぞれの町で過した当時の女学生の実像に迫ってみようと思う。

酒田の「玉影館」，弘前の「矢川写真館」は，いずれも肖像写真を撮影してもらおうとする上流家庭の人々や女学生たちに人気だったようである。酒田の「玉影館」で撮られた当時の女学生の写真は多数存在しているが，残念ながら弘前の女学生のものは数枚しか入手することが

できなかった。以下に取り上げる女学生の写真はそれぞれ，明治 26 ～ 28 年（1893-1895）と 39 年（1906）に弘前で，明治 30 年代後半に酒田で撮影されたものである。酒田の「玉影館」で撮影された同じ家族の写真を幸運にも数多く入手出来たので，その中から，その家の長女，千代女（ちよめ）の女学校時代の写真数枚を以下に紹介する。千代女は明治 23 年（1890）に酒田の旧家に生まれ，県立酒田高等女学校に通っていたことから，かなり裕福な家庭に育ったと思われる。残念ながら生家はすでに存在しないため，情報を得ることは出来なかったが，県立酒田高等女学校で千代女の1年上の学年だった佐藤とし江の日記[81] が酒田市立光丘文庫に所蔵されている事実を知ることが出来た。その日記は明治 38 年（1905）と明治 39 年（1906）の夏休みの課題として出されたもので，文面から明治後期の酒田の町や女学生の日常生活の様子等を読み取ることが出来る大変興味深い貴重な史料である。この日記には，明治 39 年（1906）8 月 9 日と 14 日に写真館で写真を撮ってもらったことが記されている。写真撮影には特別な理由があったわけではなく，楽しみのためであったようである。また日記には，髪を結うことについて頻繁に書かれており，若い娘らしく，おしゃれや自分の容姿に拘りがあったようである。他には英語や国語，理科などをよく復習していること，本を読んでいること，家族や学校の友人，教師を大切にしているといったことから，餅などの甘いものが好きなこと，ワッフルを焼いたことまでが記されている。この時代，女子教育の目的は主に「良妻賢母」の育成であったために，裁縫などの家庭科系の科目を重視していたことから，家事や食事の準備などもよく手伝っていたようである。さらに音楽は女学生の日常生活における大きな楽しみの 1 つであったようで，度々バイオリンやオルガンを弾いたことが書かれている。

酒田で最初の高等女学校は酒田高等女学校[82]（現在の酒田西高等学校）であり，明治 31 年（1898）に開校した。当時の酒田では，明治16年（1883）に火災で焼失した中学校[83] がまだ再建されておらず，商業学校も存在しなかったにもかかわらず，町は男子教育を優先する一般の風潮とは逆に女子教育に力を入れていたようである。その結果，裕福な家庭の子女たちに限られてはいたものの，高等教育を受けることが出来るようになり，卒業生の多くは，当時需要の多かった小学校の教員になったり，女子大学に進学したりした。

以下の写真の中の女学生は，明治 30 年代半ば以降，女学生の間で急速に広まった袴を着用

81） 酒田市立光丘文庫『白地かすり』（明治三十八年暑中休暇中の日誌）』及び『明治三十九年八月夏期休暇日誌』（1905-1906 の夏）（酒田市立図書館・光丘文庫デジタルアーカイブ）2021 年 9 月 16 日閲覧。https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11D0/WJJS05U/0620415100/0620415100200070?dtl=all

82） 山形県立酒田西高等学校（1998：48-51）。

83） 酒田の中学校は明治 12 年（1879）に県令三島通庸の政策のもと，飽海郡中学兼琢成学校が開校された。3 階建ての洋風建築であったが新設されてわずか 4 年後の明治 16 年（1883）に火災で焼失した。酒田の琢成学校は災焼前と同じ場所に明治 17 年（1884）に 2 階建て和風建築で再建されたが小学校のみであった。商業学校は明治 40 年（1907）に創立され，中学校は大正 9 年（1920）に再び開校された。酒田市史編纂委員会「前掲書」（1995：437）。

し，長い髪をまとめてリボンなどで飾っている。写真 33 は，おそらく千代女が女学校に入学してから 1 年後の写真である。袴を穿き，革靴を履いて，本などが入った風呂敷を持って，背景の布に描かれた風景の中の白い道を学校に向かっているかの様に撮られている。写真 34 は 17 歳の時に撮影されたものである。千代女は女学校の友達と一緒に度々『玉影館』を訪ねていたようであり，写真 35-37 には友達との仲の良い様子が映し出されている。女学校時代の無邪気で幸せな瞬間を永遠のものとして残しておきたいという彼女達の思いが感じられる。籐の椅子にゆったりと座る 1 人を暖かく囲んでいる娘達の写真は，親しい友達同士で撮影したものであろう。だがこの時代の一般的な記念写真同様に，彼女達の表情に微笑みはない。写真 38[84] は千代女が友人とオルガンを演奏している様子を写したもので，改めて当時の学生生活における音楽の大切さを思わせる 1 枚である。

写真 39 は，和服姿で洋傘をさした，22 歳になった千代女を，『玉影館』で撮影したものである。この写真が撮影された頃には，池田真佐の写真館『玉影館』は，若林安松が引き継いでいた。千代女は小学校の教員になったようである。

一方，弘前の矢川美喜が撮った写真は数枚しか入手できなかったが，そこに写っていたのは，明治22年（1889），元大工町に新築移転した私立弘前女学校[85] の生徒と思われ，酒田の女学生の写真の 10 年前，明治 26 ～ 28 年（1893-1895）に撮影された写真である。

写真 40 の 3 人の娘は，和服姿で横並びに座ってポーズをとっており，表情・髪型等はみな同じ様に見える。写真 41 は西洋風の立派な邸の屋内の様子が描かれた大きな布を背景に，テーブルクロスで覆われた洋風のテーブルに置かれたランプの光で勉強している 2 人の女学生が写っている。当時はまだ電気がなく，ランプが使われていた。2 人の表情から勉強に夢中になっている様子が伝わり，絵画を彷彿とさせるような，興味深い 1 枚である。感謝の気持ちの表現として，恩師にも進呈したようである。

写真 42 は 41 と一緒に撮影されたものであり，先程のテーブルの上にはランプの代わりに植物が置かれ，同じ和服姿の女子学生が座っている。この 1 枚も恩師に贈ったとされている。

『ふるさとのあゆみ―弘前1』[86] には，明治33年（1900）に創立された弘前高等女学校[87] の生

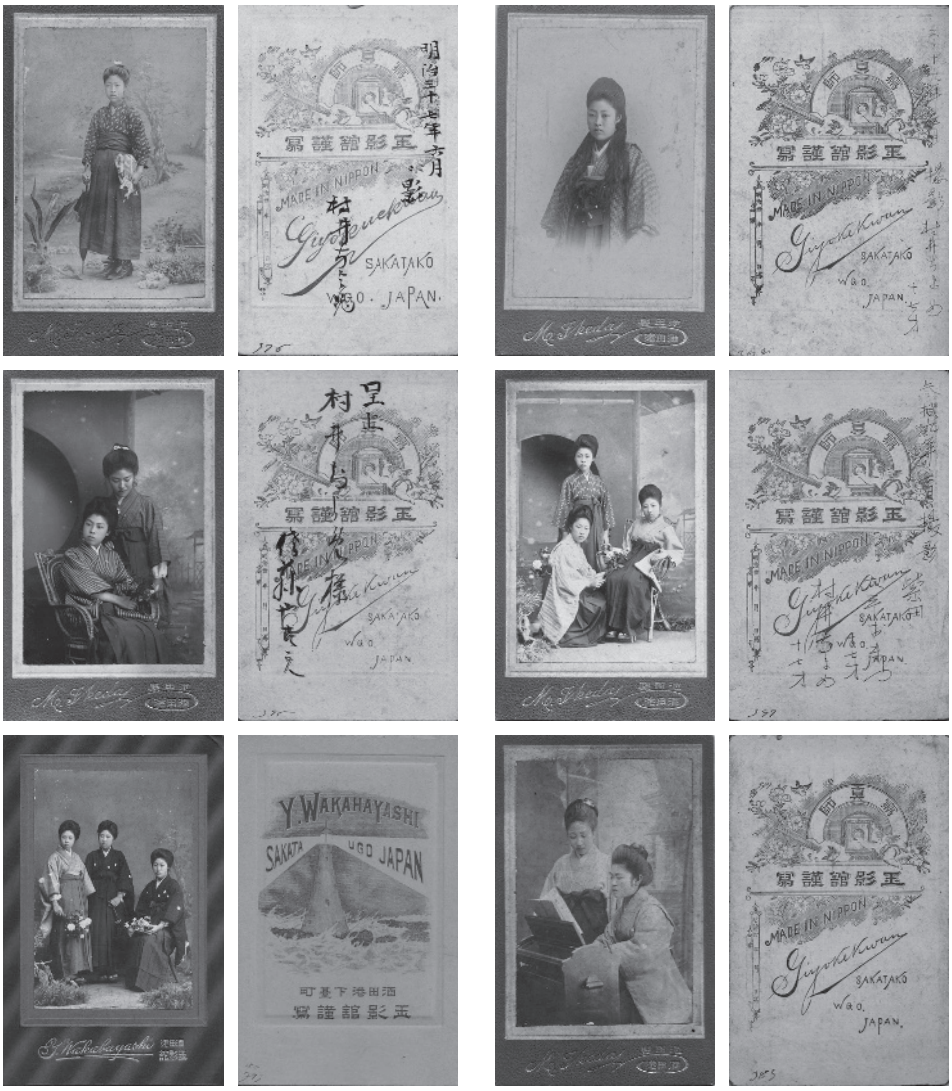
---

84） 山形県立酒田西高等学校「前掲書」(48)。

85） 弘前は早い時期から女子教育に取り組んだ。私立弘前女学校はメソジスト系のミッション・スクールとして明治 19 年（1886），元寺町の弘前教会内に来徳女学校として開校され，明治 20 年（1887）に弘前遺愛女学校と改名された。明治 22 年（1889）に元大工町に新築移転して弘前女学校と再び改称した。明治34年（1901）には坂本町に移転した。青森県女性編さん委員会（1999:23-26),「同書」(36-38)。山上笙介編（1980：72)。『新編弘前市史』「前掲書」(434)。

86） 山上編（1980：60-61)。運動会の際に，明治 37～38 年（1904-1905）頃に撮影された洋風の帽子をかぶる女学生は印象的で，モダンな写真である。山上編（1982：86-87）など。

87） 弘前高等女学校（現在の弘前中央高校）は明治 33 年（1900）に誕生した。初めは県立高等女学校と称し，県下で最初の女子高等教育を行なった学校であるが明治 34 年（1901），県立第一高等女学校



左から右へ

写真 33.「千代女の肖像」台紙の表と裏面：池田真佐「玉影館」。明治 37 年（1904）。筆者所蔵。

34.「千代女の肖像」台紙の表と裏面：池田真佐「玉影館」。明治 39 年（1906）。筆者所蔵。

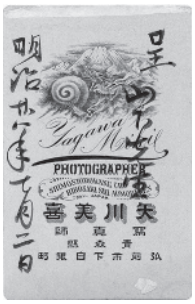
35.「千代女（左）と友達」台紙の表と裏面：池田真佐「玉影館」。明治 39 年（1906）。筆者所蔵。

36.「千代女（左）と友達」台紙の表と裏面：池田真佐「玉影館」。明治 39 年（1906）。筆者所蔵。

37.「千代女（右）と友達」（卒業式の記念写真）。台紙の表と裏面：Y. Wakabayashi「玉影館」。明治 40 年（1907）。筆者所蔵。

38.「友人とオルガンを演奏している千代女」。台紙の表と裏面：池田真佐「玉影館」。明治 38 年（1905）。筆者所蔵。

39.「和服姿で洋傘をさす千代女」。台紙の表面：若林安松（Y. Wakabayashi）「玉影館」。明治 43 年（1910）。筆者所蔵。



左から右へ

写真 40.「女学生 3 人像」台紙の表と裏面：矢川美喜（Yagawa Miki）「矢川写真館」。明治 26 年（1893）。青森県所蔵県史編さん資料（青森県史デジタルアーカイブスより）。

41.「勉強中の女学生像」台紙の表と裏面：矢川美喜（Yagawa Miki）「矢川写真館」。明治 28 年（1895）。青森県所蔵県史編さん資料（青森県史デジタルアーカイブスより）。

42.「女学生像」台紙の表と裏面：矢川美喜（Yagawa Miki）「矢川写真館」。明治 28 年（1895）。青森県所蔵県史編さん資料（青森県史デジタルアーカイブスより）。

徒の写真が掲載されている。こちらは明治 37 年（1904）頃に撮影されたもので，先述の酒田の女学生の写真とほぼ同時期であり，女学生の姿も似通っている。明治 39 年（1906）に，矢川蓮に撮影された女学生の写真もある（写真 43）。弘前高等女学校の卒業生の多くも小学校の教員になるか，または社会に出て様々な分野で活躍したと伝えられている。

このように当時の人々を魅了した写真館は，非日常の空間であった。背景には，牧歌的な風景や庭園，さらには西洋風の風景や家の屋内の様子等が描かれた大きな布が貼られ，時には足元に本物の枯枝や草むら等を装飾的に配置したりして，撮影される人々を別世界へと誘った。室内を描いた絵では，植物や洋書等が小さなテーブル上に置かれたり，撮影された人物の趣味や職業等を思わせる小物や花束を登場させたりして，独自の空間が演出された。革靴や洋傘，帽子，ショールなど洋風の服装品もよく見られた。また当時撮影された肖像写真には，着物姿で洋傘を持って写っているものも数多くあった。客を満足させるための演出や装飾品等の選択

---

と改称，明治 42 年（1909），県立弘前高女と再び改称された。昭和 22 年（1947）弘前中央高校になり，男女共学になった。「新編弘前市史」編纂委員会編，「前掲書」（437-439）。青森県女性編さん委員会編「前掲書」（36-38）。

写真 43.「女学生像」台紙の表と裏面：矢川蓮（R. Yagawa），下白銀町，明治 39 年（1906）。筆者所蔵。

は大切なことであった。写真館をよく訪れた女学生達にとっては，写真館は友人と共に楽しく過ごした青春時代のひととき，輝いていた自分の姿を永遠のものに出来る特別な場所となり，また写真師にとっても，若さに煌く前途有望な女学生の肖像を撮ることが大事な仕事であると同時に，店を賑わせてくれた彼女達の存在は，喜ばしいものであったに違いない。

**おわりに**

明治時代，東北地方は他の地方に比べて，特に商工業化の面で遅れをとっていたが，そうした中で写真館は，比較的早い時期に次々と登場し，至る所で活発に営業していた。城下町であった弘前や港町であった酒田にも写真は急速に広まり，当時は珍しかった女性写真師も誕生した。最初に開業したのが弘前の矢川蓮・美喜姉妹で，明治 14 年（1881）のまだ湿板の時代であり，また写真師になるのはかなり困難な時代でもあった。酒田では，池田真佐が明治 25 年（1892）頃に「玉影館」を開業したと伝えられている。つまり矢川写真館の約 10 年後で，写真術が発達した時期であったが，やはりまだ苦労が多かったと思われる。真佐についての情報は残念ながら少ないが，当時この町で初めて写真館を開いた写真師の 1 人として，また女性写真師の草分けの 1 人として重要な人物と言える。いずれにせよこの 3 人の女性写真師は，激動の時代，東北地方で同じく写真業に携わり活躍したほぼ同世代の女性達であり，様々な社会的圧力と闘わなくてはならなかった時代に，写真の将来性を確信して，先進的な考えと勇気を持って強い信念とともに自らの道を歩んだ女性達であったと言えよう。

当時は，明治新政府の改革によりさまざまな分野で女性の労働力が必要となった時期であり，女子教育が推進された結果，女性達の中にも職業意識が芽生え始めたと考えられる。女性写真師にとって，カメラはおそらく素晴らしい解放の道具の 1 つであったと思われる。

これらの女性写真師達が撮影した写真は，同時代の男性写真師が残したものと同様に，明治

時代に生きた人々の姿や，様々な情報を伝える非常に貴重な歴史的資料となっている。彼女達もまた，当時それぞれの地域で写真の普及に大きな役割を果たしたのだ。また，この時代に全国で写真師として活躍していた女性はまだ他にも存在していたことは間違いなく，今後の研究によって彼女たちが歴史の表舞台に出て，その仕事が改めて評価されるようになることを願って止まない。

謝辞

本研究を行うにあたっては，諸々の機関及び多くの方々にご協力いただきました。心より感謝の気持ちを捧げます。弘前市立弘前図書館，青森県立図書館，青森県環境生活部県民生活文化課（青森県史），酒田市立資料館，酒田市立光丘文庫，鶴岡市郷土資料館には，所蔵されている明治時代の貴重な写真・資料などの閲覧および拙論への掲載を許可していただき，厚くお礼申し上げます。また相原久生様，柏倉由紀子様，今野章様，中園裕様，最上谷直義様には，資料の収集に御尽力いただきました上に，色々と御教示を賜り，誠にありがとうございました。小野太右衛門ご夫妻，佐藤艸子様には，ご所蔵の写真の掲載を許可いただき，心より感謝致しております。「矢川写真館」の矢川元ご夫妻，若林愛子様，池田喜代治様におかれましても，御先祖の写真の使用を御快諾いただき，また貴重な情報と資料を頂戴いたしましたこと，厚く御礼を申し上げます。本研究のためには他にも多くの方々に大変お世話になりました。最後にこの研究を様々な面で支え，本論の日本語の校閲を引き受けて下さいました阿部静子様と津久井雅子様に深い感謝の気持ちを記したいと思います。

本研究のために 2019 年度慶應義塾大学学事振興資金の補助を受けたことに心より感謝いたします。

参考文献

図書・論文

青森県女性編さん委員会編（1999），『青森県女性史あゆみとくらし』青森県。

土門拳（酒田本の会編）（1983），『手―ぼくと酒田』土門拳記念館。

船水清（1977），『青森県の写真事始』北方新社。

Gaboriaud Marie (2006), “Scènes rurales dans la photographie japonaise de l’ère Meiji—A travers un album de Teijirô Takagi—”（明治の写真に見る日本の農村風景について），『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』（42），9–33。

ガボリオ　マリ（2016），「明治時代，山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって―鶴岡市・酒田市を中心に」『慶應義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』（48），1–31。

群馬県立歴史博物館編（2007），『島霞谷と島隆―幕末の写真師夫妻』（第 81 回企画展・島霞谷生誕一八〇周年記念展），群馬県立歴史博物館。

平井鉄寛（2013），「山形における写真の「ひろがり」―初期写真師と庄内大地震震災写真」東京都写真美

術館編『夜明けまえ，知られざる日本写真開拓史―北海道・東北編』研究報告書，東京都写真美術館，67-72。
井上光郎（1989），「幕末・明治の女写真師」日本写真文化協会編『写真館のあゆみ―日本営業写真史』74-76。
井桜直美・トーリン・ボイド（2000），『セピア色の肖像―幕末明治名刺判写真コレクション』日本カメラ博物館（監修），朝日ソノラマ。
飯沢耕太郎（1999），『日本写真史概説』岩波書店。
菊地東陽先生伝記編纂会編（1941），『菊地東陽伝』菊地東陽先生伝記編纂会。
近藤正一・中嶌 邦監修（1993），『女子職業案内』大空社，『女と職業』復刻版（第 2 巻）（近代性文献資料叢書 26），明治 39 年（1906）。
黒岩比佐子（2008），『明治のお嬢さま』角川学芸出版（角川選書 441）。
桑田正三郎（島岡宗次郎編）（1998），『月乃鏡―全国写真師列伝』復刻版（大正 5 年刊（1916）），筑紫紙魚の会。
森重和雄（2019），『幕末・明治の写真師列伝』雄山閣。
村上陽子（2019），『元治元年春，島隆は写真撮影を』日本写真企画。
日本写真文化協会編（1989），『写真館のあゆみ―日本営業写真史』日本写真文化協会。
日本写真家協会編（1971），『日本写真史 1840-1945』平凡社。
落合浪雄・中嶌邦監修（1993），『女子職業案内』大空社，〔復刻版〕『女と職業』第 1 巻（近代性文献資料叢書 25），明治 36 年（1903）。
小山松勝一郎（1972），「尾関又兵衛考」，『方寸』第四号，酒田古文書同好会，78-84。
小沢健志（1997），『幕末・明治の写真』筑摩書房（ちくま学芸文庫）。
酒田市史編纂委員会編（1978），『目で見る酒田市史』酒田市。
―――（1995），『酒田市史』改訂版（下巻），酒田市。
佐藤三郎編（1982），『写真集 明治・大正・昭和 酒田』（ふるさとの想い出，246），国書刊行会企画。
「新編弘前市史」編纂委員会編（2005），『新編弘前市史』通史編 4（近・現代 1），弘前市企画部企画課。
庄内人名辞典刊行会編（1986），『新編庄内人名辞典』庄内人名辞典刊行会。
高田可恒（1909），『山形縣莊内實業家傳』実業之荘内社（明治 42 年）。
亀井武編（1997），『日本写真史への証言』（下巻）（東京都写真美術館叢書），淡交社。
東京都写真美術館・北海道立函館美術館編（1997），『写真渡来のころ』展図録。
東京都写真美術館監修（2000），『日本写真家事典―東京都写真美術館所蔵作家』（東京都写真美術館叢書），淡交社。
―――（2005），『日本の写真家：近代写真史を彩った人と伝記・作品集目録』日外アソシエーツ。
東奥日報社（1968），『風雪の履歴書』東奥日報社。
―――（2017），『あおもり老舗ものがたり』東奥日報社。
―――編（2002），『青森県人名事典』東奥日報社。
鳥原学（2013），『日本写真史―幕末維新から高度成長期まで』（上巻），中央公論新社（中公新書 2247）。
梅本貞雄（1952），『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会），（再録：東京都写真美術館編（2007）『夜明けまえ，知られざる日本写真開拓史Ⅰ　関東編研究報告』東京都写真美術館，45-86（1-45））。
―――（緒川直人編）（2014），『写真師たちの幕末維新：日本初の写真史家・梅本貞雄の世界』国書刊行会。
山形県立酒田西高等学校（1998），『潮騒の記憶に満ちて―山形県立酒田西高等学校創立 100 周年記念誌

1898-1998』県立酒田西高等学校。
山上笙介編（1980），『ふるさとのあゆみ―弘前Ⅰ』津軽書房。
―――編（1982），『ふるさとのあゆみ―弘前Ⅲ』津軽書房。
横田洋一監修（1989），『明治の横浜・東京―残されていたガラス乾板から』写真集「明治の横浜・東京」を刊行する会。

その他（明治の雑誌・新聞・日誌など）
『弘前案内』蒔笛三郎編，明治 37 年（1904）。
『弘前案内』蒔苗三郎編，明治 44 年（1911）。
「女子写真学院」『風俗画報』第 282 号，（明治 37 年（1904）1 月 25 日：29），東陽堂。
「酒田新聞」（大正 8 年（1919）5 月 20 日：1），（長谷川写真館の広告による）。
酒田市立光丘文庫『白地かすり』（明治三十八年暑中休暇中の日誌）』及び『明治三十九年八月夏期休暇日誌』（酒田市立図書館・光丘文庫デジタルアーカイブ）。2021 年 9 月 16 日閲覧。https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11D0/WJJS05U/0620415100/0620415100200070?dtl=all
『鷹ヶ丘城（一名弘前案内記）』成田果編，玉泉堂，明治 28 年（1895）。
『鷹ケ丘城（一名弘前案内記）』成田果編，3 版，玉泉堂，明治 31 年（1898）。
『鷹ヶ丘城（弘前案内記）』成田果編，5 版，明治 44 年（1911）。
『鷹ヶ丘城（弘前案内記）』成田果編，6 版，大正 4 年（1915）。
鶴岡市郷土資料館，「阿部正己資料」574 番の資料。
読売新聞（明治 39 年（1906）3 月 14 日：4），［広告］生徒募集　男子，女子，牛込区西五軒町，写真学校。